受付番号　第 *2021037* 号

承認日：2022 年 3 月 16 日

研究概要

1.　研究名称 または課題名テーマ等

関節鏡視下腱板修復術前後における肩甲上腕関節の回旋角度の変化について

2.　研究責任者(当院)

所属：　整形外科

氏名：　梶原　大輔

共同研究の場合は代表機関 及び 代表者名

機関名：北里大学医学部整形外科

代表名：見目智紀

3.　分担研究者

所属：放射線科　氏名：園田優

所属：放射線科　氏名：塚本悟之

所属：放射線科　氏名：石田拓未

4.　研究対象者

2022 年 04 月 01 日～2023 年 3 月 31 日の間に、聖隷佐倉市民病院において関節鏡視下腱板修復術前後の MRI 撮影に動的 MRI 撮影で受け、本研究参加同意書に署名した方、又は受ける方。

5.　研究の必要性

肩甲上腕関節の回旋はほぼ全ての肩関節動作で起きる(Kuechle DK, Newman SR, Itoi E, et al. The relevance of the moment arm of shoulder muscles with respect to axial rotation of the glenohumeral joint in four positions. *Clin Biomech*. 2000;15(5):322-329)が、その動作の詳細は未だ不明な点が多い。先行研究で動的 MRI 撮像法、以下 Cine-MRI を用いて肩甲上腕関節の回旋動作を評価し、その結果、健常者と比べ肩峰下インピンジメント症候群患者において有意に回旋可動域が低下している事を報告した(Ishii D, Kenmoku T, Tazawa R, et al. *JSES International*, 2021;5(3):1-9)。しかしこの研究は横断的研究であるため、臨床症状と回旋機能との関連性は未だ不明であり、縦断的研究が必要と考えた。Cine-MRI を関節鏡視下腱板修復術の前後に測定し、臨床成績との推移を検討する研究を開始し、早期の肩甲上腕関節の改善が早期の術後臨床スコア・可動域改善につながれば、リハビリテーションの改善などにより医療費削減の一助となりうる。

6.　研究等によって生ずる個人への影響と医学上の貢献の予測

個人への影響は無い（観察研究であるため)。Cine-MRI で測定した肩甲上腕関節の回旋動作と術前後の臨床スコアや関節可動域の推移・相関が分かるため、内外旋動作の重要性がわかる可能性がある。

7.　対象者、関係者等からの問合せ先(当院)

連絡先番号：043-486-1151(代表)
担当者氏名：梶原大輔
対 応 時 間：平日 9:00-17:00

共同研究において専用窓口がある場合

該当なし

※ご注意
対象者とは、本研究に参加された方です。お問合せは、本研究に参加された方と研究関係者のみで、その他の方へのご対応はできませんので、予めご了承願います。